

講孟余話(抄)、松本三之介訳 中央公論社「日本の名著31」吉田松陰

○孟軻は騷人なり。齊の宣王・梁の恵王に遊事す。(朱子『孟子集註』)

《解説》『講孟余話』は、松陰が野山獄および杉家幽室で幽囚の生活を

序説。『史記』列伝からの引用)

送っていた当時、安政二年六月十三日から翌年六月四日にいたる一年間、

同囚および親戚の者とともに、『孟子』を購読した際の読後の感想や批

経書を読むにあたって、第一に重要なことは、聖賢におもねらないことであ

評・意見等を各章ごとに記し、一書にまとめたものである。稿の完成は安

ある。もし少しでもおもねるところがあると、道は明らかにならぬし、学

政三年六月十八日であった。参加した者のなかには、(叔父)久保五郎左

問をしても益なく、かえって有害である。たとえば、聖賢といわれる孔子

衛門、高洲滝之允、玉木彦介、(隣人)佐々木梅三郎などがある。

や孟子のような方も、自分の生まれた国を離れて他国に行き仕官しようと

『講孟余話』は、はじめ「講孟劄記」と題された。劄は針で刺す意で、劄

されたが、これは納得のいかぬことである。

記は、書物を読んであかも針で皮膚を刺し鮮血がほとばしるように、そ

およそ君臣の関係と父子の関係とは、その意義・本質を同じくするもので

の意義に肉薄し、また針で衣を刺して縫いとするように、その文章の意味を

ある。自分の主君は暗愚であるからといって自国を去り、他国に行つて新

明確にする意であるが、松陰はその域に達せず、『孟子』講義の余話でし

しい主君に仕えようとするのは、ちょうど父親を頑固で愚か者だとして自

かないとして改題した。

分の家を飛び出し、隣家の年寄りを父親とするようなものである。孔子や

孟子が、この君臣間の本義を誤られたことは、いかようにも弁解の余地のない点である。

『大学（儒教の経典。四書の一。朱子が経一章と伝十章とに区別し注釈を

施してから、世に重んじられた。経については明明徳・新民・止至善を三

しかし、つぎのようについてこれを弁護する人もいる。すなわち、孔子や

綱領とし、格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下を八条目

孟子の道は広大であり、しかもその精神は天下をよくしようとするところ

とした）』の冒頭に出てくる実践の順序で、それは決して乱すべきもので

にある。なにも自国だけが問題なわけではないのだ。要するに、名君・賢

はない。たとえ一身一家を捨てて国を治め天下を平らかにしたとしても、

主にめぐりあって自分の正しいとする道を行なうことができるようになれ

それは管仲（春秋時代の斉の宰相。桓公に仕え、齊の富強につとめた）

ば、結局は天下全体がその恩恵をうけることにもなるのだから、自分の生

や晏嬰（春秋時代の斉の宰相。靈公・莊公・景公に仕えた）のごとき者の

まれた国もその天下の一国として当然その恩恵をうけることになるので

やり方と同じで、いわば正道をひまずに獲物を手にするようなものである。

ある、と。

世間では、君主に仕える道を論ずる者のなかに、「功業立たざれば国家に

しかし、自分が思うに、天下をよくしようと考えて自分の国を去るのは、

益なし」というようなことをいう者がいる。これは大きな間違いである。

国を治めるのだといって自分の身を修めることを考えないのと同じである。

「道を明らかにして功をはからず、義を正して利をはからず」とこそいう

「身を修め、家を斉え、国を治め、天下を平らかにする」というのは

べきで、君に仕えて意見が合わないときは、諫死するもまたよいではない

か。
である。漢土にあっては君たる道も自然違っている。たいてい聡明叡知衆

こつという結果になってしまつては、一身の功業も名誉もまったくなくなつ
にぬきんでた者が、その国の君長となるというのが道となっている。それ

てしまつように考えられようが、決してそんなものではない。人臣たる者
ゆえ堯（中国古代伝説上の聖天子。五帝の一人。位を舜に譲った）、舜

の道を失わず、永く後世の規範となることにより、後世かならずその事
（中国古代伝説上の聖天子。五帝の一人。堯に用いられ政治にあたり功績

蹟・精神に心を打たれて感情興起する者が出るにちがいない。そしてつい
をあげる。堯から位を譲られ、天下をよく治めた。禹に位を譲る。禪譲の

にはその国の気風も正道に一定し、賢愚貴賤の別なく、すべての節義をあ
典型）はその位を他人に譲り、湯（殷の初代の王）・武（周の初代の王）

がめ尊ぶようになるのだ。
はその主君を放伐したけれども、聖人の道にならそむくものでないとさ

だから自己一身についていえば、功業も名誉もないようだけれども、百年
れている。わが国は、上は天朝より下は列藩にいたるまで、君たる地位は

千年の遠い将来のことを思えば、その忠義たるゆえんは、じつに測り知れ
千万世にわたって世襲し絶えることがない。この点は、とうてい漢土など

ないものがあるのではないだろうか。これを目ざまきの忠義とは違った大忠
の比肩しうるものではないのだ。

とつのである。
それゆえ漢土の臣は、たとえば半年期限で一人の主人から他の主人へと渡

しかしながら僕のこの議論は、そもそもわが国の国体に即して出てくる論
りあるく奴婢のようなものである。主君の善悪によって仕えるべき主を

選び移ることは、もとより当然のこととされる。しかしわが国の臣は、何代にもわたって主君に仕える譜第の臣であるから、主人と生死をともにし、喜憂を分かちあい、たとえ死に至るとも、主を捨てて去ることを認めるが

きるだろうか。それはほかでもない、前に論じたように、わが国体がそもそも外国とは異なっている、その意義を明らかにし、日本全体のために全

ああ、わが父母は何国の人であるか、わが衣食は何国の物であるか。書を

がいのちを投げ出し、臣は君のために殉じ、子は父のために殉ずる、という志が確固不動のものとなっているならば、どうして西欧諸国を恐れる必

読み道を知る、これまただれの賜物であるか。今、少しばかり主人と意見

要があるか。願わくば、諸君とともにこのために努力したいものである。

はたしてどんなものであるか。僕は、孔子・孟子を今ここに呼び起こし

てきて、いっしょに君臣の義を論じあいたいものだと思つ。

聞くところによると、近ごろ道をわきまえぬヨーロッパの諸国は、それぞ

れ賢智の人物を推挙し、その政治を革新し、たいへんな勢いでわが国を

凌侮する形勢にある。われわれはどのような方法でこれを制することがで